



第34回岩手大学 COEフォーラム

2004年度から採択された岩手大学21世紀COEプログラム「熱-生命システム関連学拠点創成」では、関連分野において国内外で活発に研究をされている方をお招きし、月1回のペースでセミナーを開催しております。今回は立教大学の田中啓太氏に講演をお願いしました。自分の雛を他種に育てさせる托卵という独特の繁殖様式を持つ鳥の行動生態の研究を紹介していただきます。直感的で分かり易い研究ですので、専門外の方もぜひご参加ください。

第34回担当・岩手大学21世紀COEプログラム
齋藤 茂 (shigeru@iwate-u.ac.jp)

日時：2006年9月15日(金) 17:00～18:30
場所：岩手大学農学部4番講義室

田中 啓太 氏

立教大学大学院理学研究科生命理学専攻
日本学術振興会特別研究員 (PD)

ジュウイチの雛による宿主操作 鳥類における認知と寄生者による搾取

多くの生物において、子孫に養分などを提供し、その生存や繁殖成功の確率を上昇させることは自信の遺伝子の複製を集団中に広げうるため、適応的であると言える。動物におけるこの親による子への投資 (parental investment) は、養分などの物質面においてだけでなく、世話という行動の形もとる。つまり、親による世話 (parental care) である。様々な資源と同様に、親による投資は捕食者や寄生者によって搾取されるが、特に親による世話行動を搾取することは托卵寄生 (brood parasitism) と言われ、鳥類のほか、魚類、昆虫類などで知られている。

ジュウイチ (*Cuculus fugax*) は東アジアに生息するカッコウ科の托卵鳥で、日本には夏鳥として飛来し、繁殖を行う。オオルリ、コルリ、ルリビタキといった“青い鳥”を宿主として選ぶことが知られており、メスはそれらの鳥の巣に青い卵を産み込む。ジュウイチの雛は他の鳥では報告されていない非常に珍しい特徴を持っている。翼の裏側は羽根が生えておらず、口の中の皮膚と同じ色の鮮やかな黄色い皮膚が裸出しており、給餌の際、翼を持ち上げ、その皮膚裸出部を宿主に対して誇示する(図)。我々は、ジュウイチの雛がこの皮膚裸出部によって巣の中にいる雛の数を多く見せかけ、生育に十分な餌を運ぶよう宿主を操作しているという仮説を立て、検証を行った。

